

「海は宝物！みんながひとつに！！」実施報告書

- 【趣 旨】 何らかの事情により児童養護施設で生活することとなった子供に、自分を見つめなおしたり、集団と関わったりする活動を通して、自分のよさや仲間の大切さに気付かせ、自分らしさを発揮できるようにする。
- 【主 催】 独立行政法人国立青少年教育振興機構 国立江田島青少年交流の家
- 【共 催】 児童養護施設 広島修道院きずなの家
- 【期 日】 平成28年8月21日（日）～23日（火）
- 【会 場】 国立江田島青少年交流の家
- 【対 象】 児童養護施設等で生活している子供
- 【参加者数】 17人 小学校1年（2人）、小学校2年（1人）、小学校3年（4人）
小学校4年（4人）、小学校5年（3人）、小学校6年（1人）
高校3年（2人）

【企画・運営のポイント】

- 参加する子供たちの課題を把握し、より効果的なプログラムを作成するために、児童養護施設職員や児童相談所職員と事前の連携を密に行う。
 - 事前に施設を訪問し、施設職員や児童相談所職員から普段の子供たちの様子や里親のもとで生活をする子供たちの家庭状況を聞き取り、綿密な打ち合わせを行う。
 - IKR（「生きる力」を測定するための評定用紙）実施の協力を依頼し、参加する子供たちのもつ課題を把握し、その結果を共有する。
- 仲間の大切さに気付かせるために、普段体験できない海辺の生物観察やカヌー等の活動に、仲間とともにチャレンジすることで、仲間とコミュニケーションをとり自信をもって行動できるようにする。
- 法人ボランティアには事業内容や運営上の配慮事項を考慮したうえで、ボランティアとして豊富な経験をもち、互いに連携を取り合いやすいメンバー（8名）を選んだ。また法人ボランティアが前泊してアイスブレイクや活動プログラムの運営について検討し、プログラムのリハーサルや準備を行うことでスムーズな事業運営を行う。
- ボランティアから子供たち一人ひとりへ、ふりかえりの用紙に評価の言葉を記入するようにし、活動の意欲を向上させるようにする。
- 全体のプログラムを構成する上で、法人ボランティアにアイスブレイクの運営と、各プログラムの補助を行ってもらった。

【活動の実際】

【第1日目】8月21日（日）

- 15:30～ アイスブレイク・海辺の生物観察
・カヌー準備
- 18:30～ 入浴・夕食
- 19:30～ ウミホテルの観察準備
- 21:00～ 1日のまとめ
- 21:30～ 就寝



【第2日目】8月22日（月）

- 11:30 交流の家着
- 11:40～ 始まりの式・オリエンテーション
- 12:10～ シーツ受け取り・ベッドメイク
- 12:40～ 昼食
- 13:30～ アイスブレイク
- 15:30～ 海辺の生物観察
- 18:30～ 入浴・夕食
- 19:30～ ウミホテルの観察
- 21:00～ 1日のまとめ
- 21:30～ 就寝



【第3日目】8月23日（火）

- 6:40 起床
- 7:10～ 朝のつどい、清掃
- 7:50～ 朝食
- 9:00～ 掃除、退所準備
- 9:30～ カヌー
- 12:00～ 昼食
- 13:00～ まとめ、アンケート記入
- 13:40～ 終わりの式
- 14:10 交流の家出発

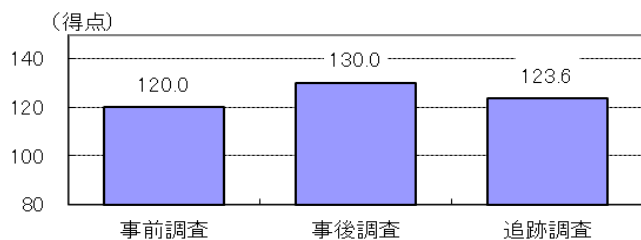


【成果】

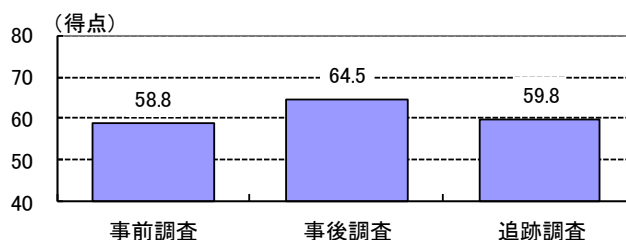
(1) IKRの結果から事前から追跡にかけて有意差はみられなかったものの、すべての分野においてポイントが向上していた。また事前調査より追跡調査のポイントが向上した項目が28項目中19項目あった。

『IKR評定用紙（簡易版）』参加者アンケート調査より

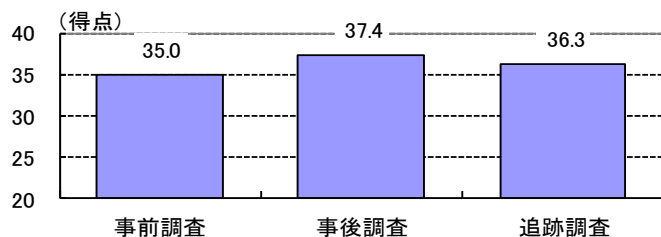
「生きる力」の変容



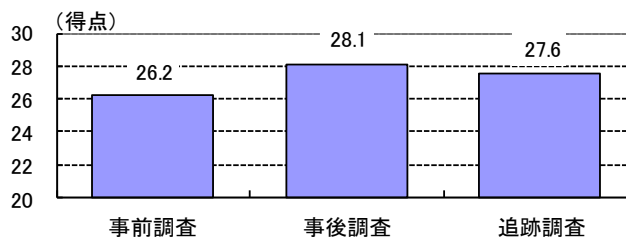
「心理的社会的能力」の変容



「徳育的能力」の変容



「身体的能力」の変容



事前調査よりも追跡調査のポイントが向上した項目

No.	項目	事前調査	事後調査 (終了直後)	追跡調査 (1か月後)
1	いやなことは、いやとはっきり言える	4.50	5.21	4.79
4	暑さや寒さに、まけない	4.36	4.79	5.29
5	だれにでも話しかけることができる	4.57	4.79	4.57
7	多くの人に好かれている	3.64	4.29	4.07
8	人の話をきちんと聞くことができる	4.36	5.14	4.43
9	自分のことが大好きである	4.43	4.43	4.50
10	ナイフ・包丁などの刃物を、上手に使える	4.64	5.36	4.79
12	いやがらずに、よく働く	4.21	4.00	4.29
13	早寝早起きである	4.36	4.57	4.57
14	自分かってな、わがまを言わない	3.64	4.43	3.79
15	小さな失敗をおそれない	4.14	4.07	4.64
16	人の心の痛みがわかる	4.00	3.71	4.36
18	とても痛いケガをしても、がまんできる	4.36	5.07	4.43
19	失敗しても、立ち直るのがはやい	4.14	4.71	4.29
20	季節の変化を感じるができる	4.29	4.50	5.00
21	だれとでも仲よくできる	4.36	4.86	4.71
24	洗濯機がなくても、手で洗濯できる	3.50	4.14	4.14
25	前向きに、物事を考えられる	3.71	4.57	4.36
26	自分に割り当てられた仕事は、しっかりとやる	4.50	5.29	4.71

- (2) 海辺の生物観察では、マテガイ等の生物の採取を通して、多くの子供達が互いにコミュニケーションをとりながら歓声を上げる様子が見られ、達成感を得られているようであった。ウミホテル観察研修においても、互いに声をかけあいながら水泳場までの暗い夜道を歩くことができ、水泳場では自分たちで採取したウミホテルの美しさに感動していた。
- (3) アイスブレイクの運営を法人ボランティアに任せることで、ボランティア一人一人から事業を運営していこうとする意識の高まりが感じられた。事業スタートからボランティアと子供たちが互いに打ち解けあうことができた。
- (4) 子供たちのアンケートの「色んなことが体験できて楽しかった。」「みんなと交流できてよかった。」といった感想から、仲間の大切さに対する気づきも感じられ、連携団体からも肯定的な評価を得ることができた。
- (5) 児童養護施設職員や児童相談所職員の方から、子供たちが普段できない体験ができるとても良い取り組みであるという評価をもらった。また里親にとっても子供と離れる時間がとれることの良さについても言及されていた。

【今後の課題】

- 児童養護施設・広島修道院きずなの家と広島市児童相談所との連携事業として行った今回の事業は、連携先が決まるまでかなりの時間を要し、最終的には当初の日程を縮小して開催することとなった。いずれの団体と連携を図るにしても、事業開催の前年度中に日程調整をする必要がある。
- 当初予定の2泊3日から1泊2日に日程を縮小したことで、ゆとりをもったプログラム運営ができなかった。事業のねらいである「自分のよさや仲間の大切さに気付かせる」ためには時間のゆとりをもたせ、その中でねらいを達成できるようなしかけをしていく必要がある。